

哀愁

シベリアで聴こえた日本の童謡

東京都 島村幸雄

昭和十九（一九四四）年一月二十二日頃だったと記憶する。勤めから帰宅すると、母が「会社に電話しようと思ったけれど、もう帰る頃だと思ったので電話しなかったよ」と、入隊通知が届いたことを言い、その通知書を私に渡す。もう来る頃だからねと通知書を見た。

入隊日、昭和十九年二月一日午前十時、国電品川駅臨時ホーム集合、本状持参のこととあり、当日の携行品等が記入されており、入隊部隊名は記載されていない。現地入隊だなど私はつぶやく。服を着替えて、道場へ行ってくるからと母に言い文閲を出ようとする。母がもう道場はやめたらと言う。私はそのために行くんだよ、稽古でけがしたら非国民だからね、散髪

も帰りにして来るからと表へ出た。

明日からの仕事のことや私自身の用事などあれこれ思いを巡らす。昨年二月に徴兵検査を受け第一乙種だったが、体はどこも異状はないが痩せているので体力をつけるために八カ月ばかり近くの柔道場に通い稽古をしていた。

当時私の勤務先の会社は第百生命徴兵保険相互会社で、第百銀行・千葉銀行・常陽銀行・日本火災海上保険等の系列会社で、日本橋の本社に勤めていた。翌朝会社に出勤し、秘書課に入隊通知書を提示し休職届を提出し、私の職場の代理店課で現在執務中の仕事を済ませて、翌日は事務引継書に担当事務の昨日までの処理経過等を井上主任に提出、明日より休職方お願いをした。

当日会社の閉店後に、関戸課長外課員の方たちにより、戦時下ではあったが数寄屋橋のたもとのビヤホールで私の送別会を催していただいた。

入隊日の迫るなか、親しい友人との懇談をしたり親戚等を訪ね挨拶のあと、当時私の兄も東部第八部隊に

兵役中であり、残る家族は初老を迎える両親と小学三年生在学中の弟だけなので後事をよろしくお願いしておいた。挨拶はおおむね済ませたので私自身の書物や学校、会社等の証書類等梱包して母に保管方を頼んでから入隊日携行するものを揃え確認し取りまとめおいた。入隊日を明日になった前夜、早めに就寝した。

入隊日の朝がきた。朝食を終え両親に入隊したら手紙を出す旨伝え、先に知らされた私たちの入隊送別会場の第一小学校へと家を後にする。地元在郷軍人会と愛国婦人会の方々から激励の祝辞をいただく。他に二人の入隊者を代表して答辞を述べ、必勝完遂武運長久の期待を受け校門を出発。王子駅まで数十人の方の見送りをいただく。駅で見送る方々にお礼を述べ、親戚の方たちは品川駅まで同行していただき品川駅でお礼を述べ別れた。

私たち入隊者と指定された臨時ホームの乗車入口に行った。現地の部隊より出向の下士官兵に入隊通知書を渡す。下士官兵は手元の名簿と照合チェックして、通知書を返しながら指さす方向の階段を上がり、停車

中の列車の前にいる下士官の指示を受けるようとのことで、列車ホームに上がり待機中の下士官に通知書を渡す。下士官は私たちに同行を促し、乗車の列車の前で列を作っている入隊者の後に続くようにとのことでその列に続く。そのうち先ほどの下士官より氏名を呼ばれ、その順に車内の座席に着く。しばらくして全員乗車後、下士官より車内の注意事項とこれから日程の説明で、この列車は最終博多駅下車し一泊し、翌日身体検査後兵器支給と軍衣類等の支給、その後に入隊部隊名を伝えるとのことである。車内の窓のカーテンがつり下げられ列車は発車する。横浜駅を出たころ窓のカーテンがつり上がり窓外の田畑の光景が流れるように動き過ぎていった。

一般の列車の運行のため軍用列車は、駅ホームや途中走行中時間調整による待ち合わせもあり、これ以外に途中駅で食事の分配や湯茶の接待を受け、愛国と国防の両婦人会の奉仕や私たちへの期待と激励など、寒い中、感謝する。翌日夕刻目的地博多駅に到着、博多港近くの旅館に入る。既に準備をされていた夕食を済

ませた後、入隊前の身分調書の用紙を受け記入。提出後下士官より就寝時間までに入浴をするよう指示あり。

明日の日程は既に車中で伝えられており、兵器及び軍衣支給後は入隊者の着用している衣類は、小包として各自の住所地に送り返すので梱包し各自の自宅に発送する。そのあと博多港に至り乗船し出帆とのことであつた。連日狭い列車で過ごしたので疲れのせいかなの夜はよく眠れた。

翌朝七時に起床し、私服に着替え洗面朝食後旅館を出發。近くの中学校の講堂で身体検査を受け検査を終了した。全員異状なく入隊した。このあと別室で軍衣類と兵器等支給があり、左記の支給があつた。

軍衣袴、襦袢、袴下、襟布、靴下、雑のう、巻脚絆、防寒帽、防寒外套、防寒手套、修繕袋（鉄・針・縫糸）、階級章、九九式歩兵銃、帶剣、帶革。

右支給後私服を軍服に着替え、やっと兵隊らしくなり緊張感があふれた。

ここで下士官より、銃と剣はお前たちの命を守る大

事な兵器だから日頃よく手入れを怠らざること、この兵器には番号が刻印されているから各自その番号を記憶しておくこと、巻脚絆は入隊後着用するので雑のうに入れ、その他今必要のない支給品もまとめて雑のうに入れておく等あり、軍用品整理を終え、先ほど渡された小包用紙に着用していた私服類等梱包、上衣の物入れに、「元気で出發します、ご安心下さい、軍服支給されましたので返送します」と書き入れた。

一時頃昼食の弁当が渡され、用務室で湯茶をもらい食事をした。

博多港へ出發の五時まで休憩とのことで、先ほど下士官から教えられた銃の又銃をし、身近な入隊者たちが輪になり思い思いの話を交わし、煙草など吸う者等いて時間を待つ。下士官が来て出發とのことで急ぎ、校庭に整列し博多港に向かう。銃を担ぎ行進する。博多港に着く。すでに輸送船が接岸している。下士官兵と船員の打ち合わせが終わり乗船。私たちは船底で畳三畳の広さを五人で占める。狭いが各自持ち物を隅に重ね、銃は傷がつかぬよう布をあて船壁側に横にし、

どうやら各自座れるようになる。夜、敵潜襲撃の訓練あり。船外避難等の行動演習あり、船も公海に出たのか船酔いする者もある。船は順調に航海して釜山港に接岸する。私たちは上陸埠頭に出た瞬間身を切るような寒風に身をすくめる。灯火管制下か港も薄暗く、前方闇にかすかに望む釜山が一層寒さを感じさせた。

上陸し下士官兵たちの打ち合わせ後、釜山駅に行く。駅構内に待機している列車に乗車する。二月五日の払暁であった。北満の東寧まで五日間の行程で釜山駅を発車する。博多港で満州の東寧の国境守備隊に入隊することは知らされたが部隊名は説明はなかった。

満州であるとわかったので、それだけで行き先が見え、気が落ちつく。車窓から見る女性の服装は、やはり本国でありチョゴリを着ている。朝鮮半島に来たという実感がする。途中駅で弁当と湯茶を婦人会の方たちよりいただく。列車は鮮満国境の安東を越え新京（長春）、そして吟爾を通過した。

満州国に入り列車は、広野や大平原をかなり速度をあげ終着の東寧駅に向かった。

やがて列車は綏芬河^{スイフンガ}を越えたころ下士官兵が、間もなく東寧駅に到着するから下車の用意と列車内のごみの回収廃棄処理等の指示あり、長かった輸送も終わり兵営生活の気概が沸いた。

東寧駅に到着、既に各部隊から入隊兵の輸送車が駅頭に到着している。私たち入隊兵はそれぞれの引率下士官の指示で所属部隊の輸送車に乗車し腰を下ろす。その頭上に防寒の覆いをし部隊へ向かう。部隊営門内で輸送車を降り各中隊所属の將校に引率され中隊に向かった。

この日は二月十日、東京を出発して十日目であった。中隊兵舎前に整列し、中隊長の訓辞の後、各所属の班長に従い兵舎に入って行く。私たちも所属の班長に続き班内に入り机の前で整列し、高尾班長から部隊の概要について説明を聴く。

軍隊生活の初日となる班長の説明要旨は、当部隊は牡丹江省東寧県郭亮船口に位置し、第一国境守備隊第四地区に属する第七七七部隊で、この中隊は第一中隊で、中隊長は伊藤中尉殿。中隊の編成は第一班が軽機

関銃班、通常軽機班で、この班が私たちの班である。

第二班は擲弾筒班、第三班は重機関銃班とのこと。当
第一班は現在四人の古年兵、班長と今ここにいる私た
ち初年兵二十八人が加わり三十二人であること。この
部隊は郭亮船口に面するソ連の国境警備で、その間に
流れる綏芬河支流が国境線である等の話で、部隊の陣
地等は現状を見てその都度、状況説明の方がわかりよ
いので詳しくは省略する。内務班のことについては後ほ
ど班の先任兵から話があるから、今日のところはこの
程度とするとのこと。今日は内地からの長旅で疲れも
あろうから班内で休憩をしながら軍衣類に各自の名札
を付けておくこと。それと私たちの両親も心配してい
るだろうから手紙を出しておけ、郵便紙は後ほど渡
す。ただし部隊のことについては余計なことを書くな
等の話であった。

私たち初年兵は班の中央にある長机で、各自の軍よ
り支給された物品の名札を作り縫い付けや階級章の縫
い付けなどをする。その後、古兵から銃と帯剣の手入
れや、軍衣の折り畳み方や、整とん棚へのそろえ方、

その他日常の内務班の作業の分担や役割などの説明等
聞く。午後は初年兵たちで日常の用務等、古年兵から
指導を受け、各用務の分担を当番制など初年兵話し合
いで決めた。

ここで私が入隊した時点の南方の状況につき記述す
る。誤りないよう、終戦後復員し戦記図書など参考に
した。

私が入隊したこの二月十日頃の時点から、日本の南
方作戦が攻勢から守勢へと逆転の様相のなかで、当時
入隊前の私は新聞報道やラジオ放送等ではそれほど
は思われない軍報道部の発表で、いずれは敵を本土に
近づけ一気に粉砕し戦況を有利に展開するのではない
かと想定していた。いわゆる撤退という戦況を転進と
いう表現もあり作戦上とも思った。

緒戦からの戦況は、昭和十六年十二月八日の真珠湾
奇襲以来日本軍はマレー半島に上陸し開戦の詔書、そ
してマニラ占領、ラバウル上陸、シンガポール占領、
蘭印無条件降伏等昭和十七年三月まで赫赫たる戦果を
挙げた。七月に至りミッドウェー海戦において大敗、

米軍のガタルカナル島上陸開始、同島守備の日本軍の撤退。十八年四月山本連合艦隊司令長官の戦死。五月アッツ島守備隊の玉碎。九月御前会議で絶対国防圏決定。十九年三月インパール作戦開始、七月サイパン島守備隊玉碎、十月米軍レイテ島上陸、特攻隊初出動という戦闘状況であった。

入隊してからは隊内で南方作戦の情報等一切知らされることはなく演習に勤務に作業に明け暮れしていた。

入隊最初の朝を迎えた日は紀元節で、中隊は警備勤務のほかは休みで古兵たちは外出を楽しめたが、初年兵が入隊したので外出の許可なく、寝台で読書や、酒保に行くなどして過ごしている。初年兵は午前中班内の清掃や雑用で休んでいる暇はない。昼食後は食事当番の後片付けの戦友以外は自分の時間として過ごせるので、班の机で腰掛け雑談している。この机は食事、兵器手入れ、書き物等すべて共通で便利だ。終日静かだった。

翌朝六時、最終不寝番兵の起床の声で飛び起きる。

隣の戦友と組み、古年兵の寝具と自分たちの寝具を整え、点呼整列の連呼で急ぎ舎前に整列し、班長による自班の人員報告を週番士官に報告の後解散。班内に戻り班長室掃除や班内の掃除、洗面などするうち週番上等兵引率で当番兵は飯上げに炊事に行く。飯上げが中隊に戻り、兵員数により各班ごとに食缶に分けて班で机に並べられた食器に入れ盛りつけをし、その分量の平均を週番上等兵が各班を見て回り、各班の平均を確認してから各班ごとに食事となる。食事が終わると後片付け、食缶返納を食事当番がし、他の兵は班長室や班内の掃除をする。これが終わる頃は八時近くになり演習整列時間となった。

厳寒期で零下十度以上で演習間は冬の軍衣、その下に防寒襦袢袴下を着用、防寒外套は着用しない。演習は軍人基本の姿勢から隊列行進などを経て、小銃訓練、銃剣術、射撃訓練、手榴弾投擲訓練、敵前匍匐攻撃訓練及び戦車破甲爆雷の投入訓練等を経て、軽機銃の射撃突進等の演習終了し、一期検閲を七月下旬に終了してやっと一人前の兵隊になったが、当時の一期検

関前の内務班における古年兵から受ける私的制裁も例外なく、私たちはちょうだいした。私も十回以上はピントを受け、入隊後最初の一発でブリッジの入れ歯が口の中で外れて舌が切れたことがあり、その入れ歯をしないように厠に投げ捨てた。私的制裁は古年次兵の欲求不満を満たす環境だったのだろう。午後八時から内務班では魔の時間であった。

八月上旬より私たち初年兵は、郭亮山の麓近くの丘陵地帯に戦車壕掘りの作業を命ぜられ、その作業地に天幕を設営し泊まり込みで発掘作業をする。深さ五メートル延長百メートル余のもので、工事完成まで二十数日くらい要したと思う。工事も終わり中隊に戻り三日ほど経った頃から国境警備の任務を命じられ、勤務は徹夜勤務で陣地において立哨動哨の国境線警備の任務である。

この勤務をしていた十月頃、私の班と一緒に入隊した満州の開拓団にいた中山（仮名）が部隊営門の営倉に入倉した。彼は外出中に私信を郵便ポストに投函し憲兵に見えられ逮捕された事由のよし。この場合営門

の歩哨は入倉兵を出した中隊からも衛兵勤務につくうで、彼をよく知っているので立哨中なにかとつらかった。彼は後述するシベリア第四分所でも脱走し、ソ連の警戒兵に逮捕され、あの酷寒の営倉に入れられて寒さに堪えているのを見たが、その後の消息はわからない。

国境警備していたこの頃一日間だけだったが、兵舎裏側にある弾薬庫の弾薬運搬作業が部隊から中隊になり、急遽私たち兵十数人がこの作業に出る。他の中隊からも出動し弾薬庫内の砲弾を運び出し、輸送用自動車に積載する作業で危険を伴うので、十分に点検をしてかなりの砲弾類を運び出した。一日がかりの仕事になり、朝から終日までかかった。移動先は私たち初年兵にはわからないが南方か本土かなと思った。国境警備勤務もその後、翌年二月まで継続勤務が続いた。二月末近く中隊の人事担当准尉の呼出しを受け、三月一日から司令部所属である通信教育隊に転属の命令を受けた。

この通信教育隊は私の部隊より歩いて一時間ほどの

東緩の第一二三部隊司令部で、この部隊の管轄の通信教育隊である。この教育隊は無線有線の通信教育で、私は無線通信班で通信用モールの発声練習から教育され、このモールスを修得して送信受信の打電傍受を会得して無線送信機による演習教育を受け、戦闘中の無線により前線から後方部隊へ、あるいは後方部隊から前線部隊へ戦闘状況等我我戦況の打電受信等の任務である。演習もこの状況の中、無線機の設営撤収や陣地移動等の訓練で、無線電波を送信受信、無線機は小型ではあるがかなりの重量で、送信用発電機はそれより重く、戦闘間の設営や移動はこの機種を背負って戦場を匍匐や突進の訓練を積み重ね、通信士としての技術を身につける。初年兵時代の一期の検閲を思わせるような激しい訓練であった。四月二十五日、教育訓練を終えた。

終了の翌日、本隊舎前で隊長の訓示の後、この教育中の評価とこれからの期待の旨述べられ訓辞を終わる、その後私たちに別命あるまで原隊に復帰方伝達あり、私たちは隊長並びに同席する教官方に教育期間中

の指導方を謝し原隊復帰のため教育隊を後にした。

中隊に到着、人事担当の准尉殿に教育終了の報告を述べ、併せて原隊復帰の指示を受けたことを報告し、これからの私の任務について尋ねると、近日中に当部隊に入隊者があるが部隊の方で入隊兵の配属が少し遅れるようなので、数日間第一中隊にて入隊兵の管理をお願いしたいということなので、今のところ任務もないので准尉殿に私でよければとお答えした。それでは中隊長殿に伺って追って連絡することのこと。その折、准尉殿から先般部隊に異動があり、君の班から高尾班長と古年兵全員転属されてそのままなんだとの話に、しばらく私はぼう然とし言葉も出なかった。転属先については准尉殿も語らず、私も伺う立場でない。准尉殿に報告を終わり第一班に入る。教育隊を本日終了したことを同年兵に話し、しばらく雑談を交わした。同年兵の話では古年兵が転属したので初年兵が国境警備勤務についたそうだ。

久しぶりに以前いた私の寝台に支給された毛布、敷布を敷いて手箱を置く。整理や持ち物を畳み整とんす

る。今のところ用務はないので身につけている下着類の洗濯をする。洗濯を済ませ班内に戻ると、准尉殿から連絡があったと聞き中隊事務室に行く。准尉殿は先ほどの件でと次のように話された。

入隊兵は二十八日午後三時頃入隊し、兵舎は先の転属で部隊内の各中隊の内務班の兵員統合により空き兵舎を一棟設けたのでその一棟（砲兵隊第三中隊舎）に入隊兵収容、食事関係は第二中隊より管理兵が当たる。

このほか、明日から右の兵舎で班内の状況を見て内務班で必要な備品類が揃っているか確認して私の方に知らせること、なお燃料の石炭について念を押された。なお、入隊兵は六十五人である。内務班に帰り同年兵にこの勤務のことを話したら、うらやましながら、通信隊を終えた員数外のおかげだなと冗談を言う。

翌朝八時に昨日言われた兵舎に行く。営庭内より少し高台にあり明るい兵舎で、各班の間仕切りがなく広く感じるが、私の中隊と同じくらいだ。早速紙と鉛筆

を持ち、内務班の端から見て回る。私の内務班より誰もいないためかきれいに見える。班内を全部見て外部関係を見る。石炭置き場や湯沸場、洗面所、物干場、厠等を見て補充分や新しく備える物等記録し、ほとんど新しくそろえる物品が多い。おかまや物干しざお、やかん、ひしゃく、石炭用器具、食器類など他にかなりある。全部見てから中隊に昼食に戻る。午後はベーチカを清掃し燃やして状態を見る。故障なく燃え異状なし。消火を十分確認し、今日調べた事項につき間違いのないよう報告書を作る。夕刻中隊に戻り調査した記録を准尉殿に報告をした。

翌日、昨日報告の用品が午後より運びこまれる。中隊内務班から十数人の応援を受けて寝台の毛布の整備で思わぬ時間もあり、五時近くに終わった。次の日は午後三時に初年兵が入隊する。

翌午後三時少し前に入隊兵が舎前に到着。私の同年兵、幹部候補生の小松伍長に引率、指示され順次各寝台の前に整列した。私は入隊兵に直接関係はないのでこの場合は気楽であった。

先ほちょっと見た感じで入隊兵の年齢に大分差があるようである。中隊に帰るまでに内務班の施設を話し、ペーチカの取扱等の説明をして第二中隊の担当に夜間の事項を依頼するだけである。そのうち入隊兵が、(もう今から初年兵だ) 舎前に出て菅庭を眺めたり厠に行く。小松伍長がこちらへ来て「やあ島村、その節はお世話になったね、ありがとう」と声をかけてくる。「伍長さんもこれから大変ですね」。伍長は煙草を出し「一本どう?」。一本いただき、伍長のマツチで一服する。入隊した頃の話は尽きず、当初初年兵教育さ、と話は続く。やがて話を終わり、夕方まで中で書き物をしているからと伍長は言って立ち去る。同年兵っていいなあと思う。まだ交替時間は早い。第二中隊の本日勤務兵が私の前で「ご苦労さまです、私が引継ぎの今井です、よろしくお願いします」。やはり二等兵、同年兵だった。「いや、こちらこそよろしくね」と、今までのことを話しておく。彼はこれから食器を洗わしたり飯上げもあるのでねと別れた。

今日の仕事も終わり中隊に戻り、今日のことを准尉

殿に報告しておく。消灯後、きょう小松伍長との話で、今回の入隊兵は満州からの召集兵で年齢も差があり、民間の職場で結構上席にいた者もあったよと聞き、そのことを思いながら眠ってしまった。

この任務について三日目、初年兵の配属中隊が決まり、私は小松伍長と別れ中隊に戻った。

帰隊後は同年兵同様郭亮陣地の国境警備とその周辺の分哨警備で、国境の最先端地帯で、この動哨中草むらから突然キジが飛び跳ね、瞬間誰かっと思声寸前のこともあり、国境警備は緊張の連続である。その後中隊に初年兵の配属はなぜなかった。このような軍務で明け暮れの頃の夜半、不寝番兵の非常の連呼と、戦闘態勢で舎前に整列と班内に響く。軍衣着用編上靴を履き銃帯剣鉄帽等装具をつけ舎前に整列する。郭亮山の方向から戦闘機が頭上を通過する。伊藤中隊長が兵舎から急ぎ足で整列の前に立った。全兵士は中隊長に注目する。中隊長は現在我が国境対岸のソ連軍戦闘機が我が陣地を越え東寧方向に襲撃を開始せり、司令部の情報によれば東寧地区の我が部隊に一斉に戦車によ

る攻撃中で、我が部隊の国境の各陣地は既に敵戦車隊の攻撃内にあり、これから陣地に赴くこと非なり。我が中隊よりの偵察隊の状況報告もしかり、予断を許さず、直ちにこれより東寧方向に行進し地区部隊と合流するといふ。

防備作戦の行動開始で、中隊兵舎に戻ることなく重機関銃隊を先頭に弾薬等輸送トラックで荷台を擬装で覆い行動開始する。時折敵機が上空に飛来するも、攻撃を受けることもなく行軍を続ける。夜間も照明灯もともさず月光のみで前進するも思うように進まず、道端には草苔が青白く鈍い光を放ち密集している。行軍中は樹木のある林の中で炊事が苦勞して作るもので辛うじて空腹を補う。炊事が糧秣用として部落より味噌を手に入れたが唐辛子の混合が多く、食べられないこともあった。

日中の行軍中に樹林の切れる平地でソ連の戦闘機の機銃掃射攻撃を受け、樹陰に走り込み被弾を避けたが、低空で飛来するので発見が遅くなる。辛い急な遭遇であったため標的がそれたが、このような行軍を続

けてようやく牡丹江省寧安県大城廠に到着し牡丹江部隊と合流する。ここで陛下の終戦の詔勅のお言葉があったことを知らされる。この日は八月十七日の昼頃であった。この地で関東軍司令部の通達により老夏家（東京城）でソ連軍により八月二十日武装解除され、数日この地で野営して過ごす。その後ソ連側の命令により牡丹江地区の旧日本軍部隊の倉庫において軍隊使用の日用品をソ連側の軍用トラックに積載する作業などさせられた。

このようなソ連側の作業の折、ソ連の監視兵（カンボーイ）は、事あるごとに「ヤボンスキー スコーラ ダモイ ハラショウ」と私たちに話しかけろそぶいていた。これは日本の兵隊はもうすぐ日本に帰るということで、日本に帰るまでの仕事だよということである。

九月初旬頃までソ連側の軽作業等しながら帰国の日を期待していた。ある日私たちは帰国ということで整列し、駅近くの鉄道路線に停車している貨車に乗車する。一両目の貨車は炊食用で二両目がソ連の警戒兵

用、その後の貨車から日本兵の乗車貨車で、貨車は小型で日本で使われている大ききの車両であった。この貨車に私たちは無造作に詰め込まれる。床はゴム敷で人間一人が座れる程度の広さであり、まるで家畜並みの輸送であった。やがて貨車は発車する。出入口は外側から錠をされたが、危険防止のためだろうと判断し、貨車の中は帰国の喜びにあふれ、早く港に着くよう皆笑顔で過ごす。連行中は戸も開かず、すぎ間からわずかが外が見える。時折停車し排尿を済ませますが、炊事から食事の分配のほかは戸は閉められたままであった。

貨車は北へと速力を早めウラジオ港を予想した帰国の夢は消えてゆく。やっぱりシベリアだ、誰かが言う。既に貨車はソ満国境の綏芬河を越えソ連領に入り、森林地帯をゆく。だまされたことが現実となり、やがて沈黙が続く。車内に響く車輪の音のみが私たちの胸を突くようだ。

やがて貨車は山林の麓近くで速度を落とし徐行する。屋根も待合所もないホームに停車した。警戒兵が

貨車から下車し、私たちに降りるよう手で合図する。下車しホームに一步出た途端日本の童謡が流れた。

雨雨降れ降れ母さんが

蛇の目でお迎へ嬉しいな

ピチピチチャップチャップランランラ

私は一瞬立ち止まる。遠い日本の郷愁が胸を打つ。

満州から運んだレコードだろう、私は今のこの環境で気がめいって足から力が抜けた。

平坦な山道際から少し上った丘状の場所に着く。二棟の前に整列させられる。ここで私たちが着用している被服類を煮沸消毒をするそうである。私たちは順次交替に消毒をする間、全員裸で草むらに座る。全員消毒を終わるには三時間はかかるらしい。この山中でこれからどこへ行くのか。消毒してまた貨車に戻るのか。消毒はシラミの駆除で、ようやく全員が終わり山中の緩やかな坂道を上る。前方にかなりの建物が樹の間から見える。やがてその建物が五棟ぐらい門の入口を通して見える。丸太を横積みにした建物が建ち並び、門から厳重な柵を二重に施してある。門に入り平

坦な広場に整列する。周田を見回すと建物は七棟ある。門の入口に警戒兵の詰所らしい。周田の鉄条網の角々に櫓かどが建っていて警備用であろう。後日警備兵の話によると、この施設は以前ソ連囚人の作業所としての施設であったそうだ。

先ほどからこの施設の所長らしいソ連将校と日本の将校との話が続けられている。やがて話し合いが終わったようである。ここの将校は蒙古人らしく、顔形も日本人に似て小柄である。この所長の話を鎌田大尉が私たちに説明される。それによると、私たちが日本に帰国する間ここで作業をすること、この施設はハバロフスク第四分所だとのこと、このあと私たちの持ち物検査後、当建物に入る。建物は全部丸太を横に積み重ねた造りで、中は入口を除き四方の壁側に二段式の丸木材で作った寝台がある。建物は地表から約一メートル掘り下げて建てられている。酷寒なのでこのように建てたのだろう。入口から階段を三段ほど下りて中に入る。中は土間で左右に煙突式のストーブがある。私たちの食事は軍隊と同様に炊事班を設けた。

朝の起床は午前六時とし、この分所入口の警戒兵立哨の詰所の軒につり下げた鉄道のレールを切断したものを金属棒で打つ、その響きが起床の知らせとなる。これ以外に使われることはない、あれば非常時だけだろう。

午前六時起床し七時までに食事を終わり、前庭に整列し作業に出発。作業場での作業は、日暮れが早いのでおおむね四時頃作業を終え分所に戻る。夕食後被服の繕いで余念がない。縫い針は針金を使い、穴の部分を中心に伸ばし内側に折り曲げて先端をとがらして作る。糸は軍隊の靴下をほとき使って補修する。食事は、黒パン三〇〇グラムを昼食として作業場に携帯する。朝と夕刻の食事は雑炊でアワやコウリヤンに冷凍トマト、乾燥野菜、山羊のあぶら等で、日本のおかゆより水分が多い。作業場炊事当番が野菜類を少しと岩塩で空き缶で煮込むが、ストーブのようで腹にこたえず作業場周辺でアカザという野草を一度ゆでこぼしをしてスープ状の中に混ぜて作る。重労働のうえ粗末な食事では常に空腹状態で体もだるく、足に力が入らず苦

しい作業の毎日であった。

作業は森林の伐採で白樺や赤松類が多く、直径二〇センチくらいから五六センチの樹木で、酷寒中は木も凍りピラー（のこぎり）も使いにくく苦勞する。ピラーは二人挽きで防寒外套を着用し防寒大手套をしての作業で、決められたノルマの達成は容易ではない、無理のようだ。作業は主として倒木を二メートルの長さに切る仕事である。切り倒した材木をトロッコの路線敷のある場所まで運ぶのだが、積雪や木の根が多く、運搬も容易ではない。一日の作業量とするノルマを決められたが現実には達成はできず、達成者には食事の増配があつたが数えるほどしかいなかったように思う。

直径五〇センチを超える樹木を切る場合、樹木の傾斜を頭に入れ切り始め、切り倒しの段階で周りで作業の者に大声で知らせることが絶対要件である。樹木枝葉の影響もあるので、その段階で中腰の姿勢でいつでも体を移動できる態勢で、倒木寸前でその場から離れるように、あらかじめ根元につまづかないように十分

留意する。幸いこの作業で負傷などを受けた仲間もなく作業を終えた。この作業も周辺の樹木もほとんど切り終わった、思えば危険な作業であつた。

この作業も八カ月の間で終わり、私たちは一部分所に残る仲間たちと別れハバロフスクの第四分所から移動することになった。移動した分所は市街地に近く明るい感じの木造二階建てである。この分所での作業は当初貨車積載物の積み下ろし作業から始まり、道路側溝工事、氷割り作業、建設コンクリートブロック造り、れんが焼き作業、ブロック建築作業、製材作業、農園収穫作業等に従事し、作業内容は次のとおりである。

貨車の積下ろしは、貨物駅に到着した石灰や石炭等を貨車から積下ろすもので、大型貨車に満載された積荷を下ろす。スコップで貨車の位置より三メートル先に積下ろし作業が五時間ぐらい要し、貨車が夜間に貨車ホームに着くと夜中でも作業に出され、昼間の作業で眠っていても起こされて作業に出された。ブロック造り作業は、コンクリートと石炭殻を混合して固め乾

燥させる。大きさは日本の建築用ブロックの三倍余りあり、製造場所から乾燥場へ運搬もあり疲れる作業であった。製材作業は川から運ばれた原木を引き揚げ、製材工場まで運ぶのと、原木を製材機で平板にする作業で、あとからあとと機械から出てくる板を乾燥場へ運ぶ作業で、原木が水分を含んでいるのでその分運搬や製材作業に荷重が加わり、作業も一苦勞であった。水割り作業は、酷寒の季節に水道水をホースで流し逐次氷の山を造り、できた氷の山におがくずをまいて保存させ、暑い頃に貨車の冷凍用とするもので、暑い季節の作業でロールで氷の山に登り氷を砕く作業、氷で滑るので危険であった。

昭和二十一年四月頃から当分所の前の建築工事をする事になり、かなり面積のある建物だが、私たちの中から入隊前大工職である人がこの建設の工事を受け持ち、ソ連側からも認められ工事が着工された。酷寒地であるため基礎を地下二メートル掘り下げ作業が行われ、掘り終わった部分に石材を敷きコンクリートで固め基礎工事を終える。そのあと基礎の上にブロック

を積み重ねてゆく工程の頃、関東軍参謀であった瀬島中佐が当分所の所長として過ごすようになり、瀬島さんも私たちと共にブロックを重ねるセメント塗りをしていたのを記憶している。瀬島さんがこの分所に見えてから私たちの給与も良くなり、煙草なども支給されるようになった。

この頃、作業から分所に帰り寝台に横になると昼夜南京虫に食われ、睡眠を妨げられ、作業の疲れもあつてつらい毎日だった。建築工事も順調に運び、少しずつ建物らしい感じになってきた。二階部分の工事に移り、ブロック運搬も二階に登る踏板を背中に背負い、用具を肩に掛け、その上にブロック二個を載せての折り返し作業で、瀬島さんがブロックを積み重ねた上にセメントを敷き、その上に私たちが運んだブロックを持ち、並べる、積み重ねる作業をしていたことがあった。そのうちにこの現場作業場に瀬島さんの姿が見られなくなつた。その頃は昭和二十一年十月十八日の極東軍事裁判の証言に出廷の頃ではなかったかと私は帰国後思った。その後この作業を八カ月くらいして作業

場が変わり、貨車の積荷下ろしや石灰の積載下ろし等の荷積み作業もしていた。

このころ、作業のある朝の作業前に、ソ連分所長より全員正門前の広場に集合するようとのことで、私たちは急いで集合して待つ間、何だろ、また作業のこただろうと思ったりした。やがて所長から、これから呼ばれた者は返事をするを伝え、手に持っていた書類を見ながら私たちの名前を音階の違う表現で読み上げ、その中に私も入っていた。読み終えた後、分所長が、今呼ばれた者は今から日本に帰国するから一時間後にこの場所に集合するようとのこと。

突然の知らせで夢のような感覚となり、一方、呼ばれない者たちの同情と、これももし自分であつたらと思ったりする。私たちは残される者たちに少し早いか遅いの違いだよ、体を大事に頑張れよと慰め合いその場を別れた。

一時間後この場所に集合する、帰国できない仲間には作業に出発していた。彼らの胸のうちを思うと心が暗い。分所を後にハバロフスク駅に向かい貨車に乗車す

る。ナホトカ港に着く。日本の引揚船が入港するまで一週間ほどの近くの住まいなどペンキ塗りや清掃等の雑用などとして、八月十一日、引揚船「永徳丸」に乗船出帆。

あの夢にまで見たこの感激。日の丸の旗が船上にひらめき、船上に船員たちの手を振って迎えられた光景を忘れることはできない。

八月十四日舞鶴港到着。待ちに待った帰国が叶い、博多港を出帆してから四年八カ月ぶりに日本の土を踏みしめる。舞鶴援護局にて復員の手続きを経て、八月二十三日懐かしの我が家に到着した。

【執筆者の紹介】

現住所

東京都北区豊島

生年月日

大正十二年一月四日生

学歴

昭和十年三月

王子区王子第一尋常小学校

卒業

昭和十五年三月

私立岩倉鉄道学校業務課卒

職 歴

業

昭和十七年七月二十日

鉄道省東京鉄道管理局池袋

駅退職

八月一日

第百生命徴兵保険相互会社

入社

昭和十九年二月一日

満州第七七部隊第一中隊

伊藤隊入隊

昭和二十三年八月十一日

引揚船「永徳丸」に乗船ナ

ホトカ港出帆

八月十四日

舞鶴港上陸復員

九月一日

第百生命徴兵保険相互会社

に復職

昭和二十五年二月四日

第百生命保険相互会社を退

社

二月十七日

東京都職員採用により北区

役所勤務

昭和二十八年三月

東洋大学短期大学部専攻経

済科卒業

昭和五十六年三月

東京都北区役所停年退職

復員後、東京都北区役所に勤務されながら、東洋大
学短期大経済科を卒業され、豊富な知識と持ち前の優
しさと地域社会に貢献され、現在も全抑協東京北区支
部の役員として御協力をいただいています。

(東京都 広瀬 金四郎)

抑 留 記

富山県 村 澤 隆 司

作った米で餅がつけると楽しみにしていた。だが正
月前に召集令状が来た。正月の餅が出立祝の餅になる
うとは思ってもいなかった。今日も一日の農作業を終
わって帰る団員が、遠くから歌って帰る。来年の今頃
の運命も知らずに……。

あの山この谷勇ましく

血潮をながした兄弟よ

いまこそほぐえめきいてくれ